

デモ圃場の創意工夫 <その4>

ストーリー性をもたせたデモ圃場

博物館の展示というのは、ある仮説（ストーリー）にもとづいて、なにをどう見せるか、どう伝えるかという創意工夫が凝らされていると感じる。その観点から考えると、デモ圃場はさしずめ野外展示ととらえることもできる。つまり村全体を博物館に見立て、絵巻物さながら、技術のつながりや展開を立体的に考えてみると興味深い。

デモ圃場での効果的な展示のしかたについては議論がわかれるところであるとおもうが、たんに点としての技術陳列にとどまらず、農家にとって興味をひくような線としてストーリー性をもたせた連続展示ができないかと長年にわたり構想してきた。ここでは、スーダン国リバーナイル州で実施中の JICA 技術協力プロジェクト（以下、リ州技プロ）のなかで試行を事例として、線でつながる展示について紹介してみたい。

リバーナイル州はハルツームから約 250km 北に位置する。典型的な砂漠気候帯に属しており、年間平均降水量が 100mm 以下となっている。ということで、天水農業の成立は極めて難しいが、そこは「ナイルの賜物」で川沿いでは活発に灌漑農業がおこなわれている。ただし、この夏季（5-8 月）の暑さというのは半端なく、日中の気温は摂氏 45 度を優にこえてくる。このような環境下では、比較のおだやかな冬季（11-2 月）を軸とした冬作中心の作付体系にならざるを得ず、夏季の作付けには積極的に取り組んでこなかった。ちなみに、このような農作物の不作期（Inert Period）は、現地では Dead Season（死の季節）とよばれており、その過酷さを言っている。

さて、リ州技プロでは灌漑農業のなかで有力な換金性の高い夏作物の導入・奨励にチャレンジした。稲作や飼料用トウモロコシ、キマメ、イチゴなどの候補が検討されたが、ARC (Agricultural Research Cooperation) に研究実績のあったゴマ・ラッカセイ・ヒマワリなどの油料作物が最終的に導入品目として選定された。リ州技プロでは、新

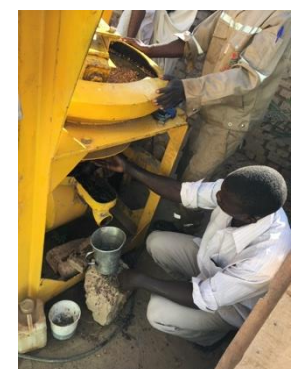
規作物の紹介として、耕起・播種・施肥・農薬散布等の栽培技術の展示からはじまり、油料作物の搾油加工、村の市場で販売するところまでの過程を展示すること、すなわち、川上から川下までの一連の流れを、市場志向型のメッセージとして発信することを心がけた。具体的には、油料作物のデモ圃場につづいて、農業機械の使用、皮むき・搾油の小規模加工場、女性グループによる食品調製、貯蔵庫、市場での売買といったすべての作業工程を連続的に「展示」した。

上記の「つながる展示」では、農家の興味の変遷にしたがって、自然に好奇心が高められる展示順などの工夫を凝らした。農家がとくに高い関心を示したのが、作ったものをどう売るかという、いわゆるマーケット・インに関する部分であった。その点からも、新技術・アイデア・技法が流れで案内・紹介されている展示方法は、農家から「わかりやすい」との評判を得た。ある農家からは「死の季節は終わった」という、ストーリーとして、うれしい幕切れの決めせりふまでとびだした。

換金性夏作物の導入は、結果として、油料作物の作付面積が増加しただけでなく、農家グループによる小規模加工施設の新規建設にむすびついた。構成・つながり・線といった流れにポイントをおいた展示装置というのは展開性・期待性が感じられ、動的でおもしろい試みだったのではないかとおもっている。



油糧作物の収穫



搾油機の実演展示